

香りの予感

君島恒星

目次

梅の香りが、鼻腔を刺激した。
あたたかくなる季節を想像すると、心地よい気持ちにさせてくれる。
カメラのファインダーを覗きながら、身体を梅の花に近づけた。
「もう！ また！」
背後から女性の声が小さく聞こえた。
しまった！
後ろのカメラマンの画角に入ってしまったか？
僕は、すぐに身体を元に戻して、後ろの女性カメラマンに謝った。
「ごめんなさい。邪魔でしたね？」
すると彼女は、恐縮した表情でこちらを見ながら
「あ…ごめんなさい。違うの。レンズのエラーが出たから…声がでちゃったの…ごめんなさい」
と、頭をぺこりと下げた。
「カメラ…調子悪いの？」
彼女は、出来の悪い相棒を紹介するように、カメラを少し持ち上げながら言った。
「たまに、オートフォーカスが効かなくなるの。そうなったら、電源を切って再起動しないとならないので、厄介なの」
彼女の手元を見ると、同じメーカーの一眼レフカメラだった。
「再起動すれば、正常に戻るのならば、本体とレンズの接点の問題かもしれませんね？」
「え、直りますか？」
「見てみないと、何とも…」
「じゃあ、あそこのベンチで！」
彼女は、近くのベンチに目をやった。

僕が「神代植物公園」に梅の写真を撮りに来たのは、今年2回目だった。
「神代植物公園」の奥に、広い梅園がある。
3日前に撮りに来たのだが、その時の写真に不思議な影が写り込んでいたのだ。ストラップがレンズの前に入ったのかなとも思ったが、梅の向こう側にその影はあった。
言にくいだが、赤黒い…丸いダルマのような感じだった。ダルマのような鋭い目ではない、必死にすがってくるような、愛おしい視線を感じてしまう。
不思議なことに、データをコピーするとコピー元とコピー側ともに、その影は消えてしまった。ほかの写真にも数枚影が写っていたが、数時間経つと消えてしまった。
幻を見ていたのか？
そんなことはない、確かにその影はあった。
もう一度撮影してみたかったので、今日また「神代植物公園」に足を運んでみた。

ベンチに座ると、初春の暖かい日差しが身体を包んだ。風がないので尚更だった。
彼女のカメラを見せてもらう。
レンズを本体から外して、レンズと本体の接点を見て見たが、綺麗だった。レンズ個

体の問題としかわからない。

「レンズの問題なのかな？ メーカー修理レベルかも？」

「やっぱりそうですよね。でも、このレンズを使って撮りたかったの！ 出来の悪いレンズほど愛着がわくものなのかしら。実は、信じてもらえないかもしれないけど、この間、このレンズでこの梅を撮ったときに変な影が写ったの…」

「え！ 影？」

「そお、赤黒いコロコロした可愛いダルマのような感じでした。信じてもらえないとは思いますが…」

「そんなことないですよ！ 僕も、その影を探しに来たんですよ！」

「嘘？！ 信じられない！ もしかして、少したつとその影は消えたりして？」

「はい、数時間で…」

「私のも…良かった。私、自分がおかしくなったのかなと思っていたの」

僕たちの瞳が交差した。

それからふたりで、色々と、前回の画角を真似て撮影してみたりしたが、赤黒い影は再現出来なかった。

光の加減なのか？ 悪い事の知らせなのか？ 僕たちにはわからなかった。

時間は正午を回っていた。

「せっかく、ここに来ているんだし、お蕎麦食べに行きましょうよ？」

彼女は僕を誘った。積極的な人だ。

「ええ…よろしければ…」

戸惑いの僕を彼女の笑顔が、穏やかにさせてくれた。

深大寺門から植物園を出て、深大寺の蕎麦屋ロードに出る。

春をうっすらと感じる季節なので、キンとした空気感の中に爽やかさを感じる。

そして古感のある深大寺を背にしながら、少し歩いた蕎麦屋に入る。

タイミングよく席に座ることができた。いつもここら辺の蕎麦屋は混んでいる。

「深大寺ビール飲みましょう！」

彼女は僕の返事を聞かずに、天ぷら蕎麦と深大寺ビールを頼み、乾杯する。

「影は再現出来なかったけど、全然残念じゃ無いですよ！」

「そうですか？」

「こうして、あなたとビールを飲んでいるからかな！」

彼女は笑顔を見せた。

でも、その後、瞳が潤み出し、両手で顔を覆った。泣いている様だった。

「何で…何で涙？ 何か変な事言いました？」

彼女は思いっきり顔を横に振った。

「そんな事ない。あなたが、ここにいてくれるから。あなたが、毎年、梅の満開の時に戻ってきてくれる…わたし、もう…やっぱり無理かな？ 演じるなんて、やっぱり無理…」

訳が分からなかった。変な女なのか？ 巻き込まれたくないという気持ちが横切った。

でも、何故か彼女に魅了されていた。

蕎麦を食べ終わると、歩いていける彼女のアパートに行き、彼女の撮った写真を見せ

てもらった。アルコールも入っていたので少し気持ちも大きくなっていった。不思議と流れに身を任せていた。

彼女は信じられない話をした。

「今年で三年目、毎年あなたと出会ってきた。でもあなたは、梅が散る頃に、交通事故で亡くなってしまう。それから毎年梅が満開の時にだけ逢える。今年は強引に、わたしの部屋に誘ってみたの…一年かけた計画なのよ」

馬鹿げていた。僕が死んでしまう… そんな事より、死んでいる？

玄関わきに伏せてあった写真立てを手にしてみると、自分と彼女の写った写真が入っていた。写真の中の自分は笑顔だった。

梅の満開の時期、例年のように写真を撮りにきた。

毎年この時期に、神代植物公園に来るのは行事のようなものだ。

梅の香りが、あたたかい春を連想させてくれる。僕はいち早く咲き誇る、梅の花が大好きだ。

カメラのファインダーに集中する。

後ろで女性カメラマンの怒りの声が…

画角に入ってしまったか？ 恐縮しながら、後ろを振り向く。

そこには、コロンコロンした可愛い赤ん坊を抱いた女性カメラマンが、笑顔で僕を見つめていた。

香りの予感

著 君島恒星

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
